

日本バイオステイミュラント協議会にきく

注目されるBS動向

酷暑に対する新たな選択肢

昨年が続いて今年も酷暑。ヒトにとっても厳しいが農作物への被害も深刻だ。昨年は、それまで暑さ対策の必要がなかった新潟など北陸地方で、暑さに弱いコシヒカリなどで白未熟粒が多く発生したり、トマトの栽培が例年通りにできない地域もあった。高温障害への対策が必要となり、本格的にバイオステイミュラントに対する関心が高まっている。

現在のバイオステイミュラント市場は国内で約100億円程度であり、農薬の3544億円（2023農薬年度）に比べると圧倒的に少ないが、みどりの食料システム戦略などを背景に、今後市場が拡大していくことが予想される。また、肥料や農薬メーカーからの参入に加え、バイオステイミュラントメーカーの買収や現場普及に向けた各社の連携や実証も活発である。

バイオステイミュラントは、農薬や肥料、土壌改良資材とは異なり、植物の非生物学的ストレスを緩和する新しいカテゴリの資材である。農業は病害虫の防除、肥料は土壌への栄養供給、土壌改良資材は土壌の物理性を改変するものであり、それぞれが法律で規定され、登録されている。しかし、バイオステイミュラントにはこうした法律の規定がない。多くのバイオステイミュラントが販売されており、今後の指針策定や位置づけに関心が高まっている。

日本バイオステイミュラント協議会事務局長の日高氏によると「当局との協議を継続中であるため詳細は控える」としながらも「現在の三法を変えることはない」と話している。

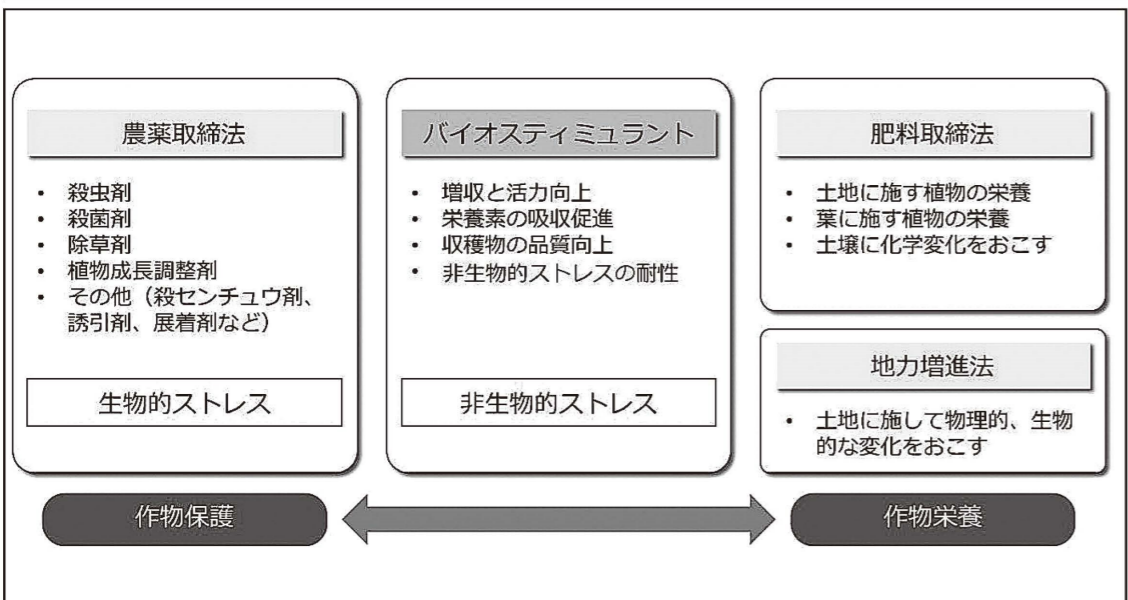
また、協議会内組織である技術調査委員会では「安全性」「品質」「効果・効能」について自主基準を設けており、製品の安全データシート（SDS）や重金属濃度情報の提供を必須としているほか、「農薬疑義資材」とならぬよう会員企業各社の対応が求められる。例えば、「病害虫に効果がある」といった表現は使えない。「植物調節剤」との違いも明確にし、表現のポジティブリストを作成して調整していく考えである。

バイオステイミュラントの効果は最大限に引き出すコツについて尋ねたところ、「植物生理に基づいた“くはずだ”という仮説に基づいて、1カ月に2〜3回定期的に散布すれば、未使用の圃場と比較して効果がはっきりと現れる。ただし、数字で表せるものではない。例えば、ブロッコリーの色づきの改善は、実際に見たり、写真で確認するしかない。客先からは、意外な効果に喜ばれることもあるのが特徴だ」と語っている。

また、協議会内組織である技術調査委員会では「安全性」「品質」「効果・効能」について自主基準を設けており、製品の安全データシート（SDS）や重金属濃度情報の提供を必須としているほか、「農薬疑義資材」と

日本バイオステイミュラントは作物の収量ポテンシャルを100から120に引き上げるのではなく、50に下がったものを70や80に引き上げる資材である。悪天候時に効果が出やすく、良好な環境では効果が現れにくい。使用する際は植物の生理に基づき、成分がどのように植物に働きかけるかを説明することが重要だ。例えば、樹勢が強いが実が付かないときは、気孔を閉じて光合成を抑え、生殖成長を促す

協議会会員企業限定で実施した2022年度バイオステイミュラント資材出荷統計調査によると、バイオステイミュラントのカテゴリー別では、微生物資材が最も多く25%を占めている。次いで、アミノ酸、ペプチド、タンパク質加水分解物が17%、腐植酸、腐植物質、フルボ酸が14%となっている。



BSの位置づけはどうか（写真提供：日本BS協議会）

また、協議会内組織である技術調査委員会では「安全性」「品質」「効果・効能」について自主基準を設けており、製品の安全データシート（SDS）や重金属濃度情報の提供を必須としているほか、「農薬疑義資材」と

日本バイオステイミュラントは作物の収量ポテンシャルを100から120に引き上げるのではなく、50に下がったものを70や80に引き上げる資材である。悪天候時に効果が出やすく、良好な環境では効果が現れにくい。使用する際は植物の生理に基づき、成分がどのように植物に働きかけるかを説明することが重要だ。例えば、樹勢が強いが実が付かないときは、気孔を閉じて光合成を抑え、生殖成長を促す

協議会会員企業限定で実施した2022年度バイオステイミュラント資材出荷統計調査によると、バイオステイミュラントのカテゴリー別では、微生物資材が最も多く25%を占めている。次いで、アミノ酸、ペプチド、タンパク質加水分解物が17%、腐植酸、腐植物質、フルボ酸が14%となっている。

協議会会員企業限定で実施した2022年度バイオステイミュラント資材出荷統計調査によると、バイオステイミュラントのカテゴリー別では、微生物資材が最も多く25%を占めている。次いで、アミノ酸、ペプチド、タンパク質加水分解物が17%、腐植酸、腐植物質、フルボ酸が14%となっている。